

◆ これまでの木育サミット

第1回	2014年3月16日 会場：東京学芸大学芸術館（東京都小金井市） テーマ：『語り合おう 木育の「今」と「未来」』
第2回	2015年1月27日 会場：新宿文化センター大ホール（東京都新宿区） テーマ：『木を繋ぐ 木で繋がる 木から始まるコラボレーション』
第3回	2016年3月11日 会場：レザンホール・塩尻市文化会館（長野県塩尻市） テーマ：『木育を「アルプスの麓」から考える』
第4回	2017年2月23日 会場：ティアラこうとう（東京都江東区） テーマ：『日本の未来を木育が創る』
第5回	2018年2月24日 会場：秩父宮記念市民会館（埼玉県秩父市） テーマ：『あらゆるライフステージを木育で彩る』
第6回	2019年2月16日 会場：あわぎんホール（徳島県徳島市） テーマ：『四国の森から始まる「木育」の話』
第7回	2020年2月8日 会場：木材会館（東京都江東区） テーマ：『木育が創る・動かす 日本の未来』

◆ 主催者紹介

T 東京おもちゃ美術館

東京おもちゃ美術館は、おもちゃを手にとり、触れて、遊ぶことができる体験型的美術館です。手作りおもちゃを作ることができる「おもちゃ工房」や、季節のイベントなど、子どもだけではなく、大人も赤ちゃんも多世代で楽しめる、さまざまなコンテンツを取り揃えております。また、国産の木材のみで作られた「おもちゃのもり」や、赤ちゃんが木の匂いや触り心地をふんだんに感じられる「赤ちゃん木育ひろば」など、木育にふさわしいコンテンツを多数そろえております。



〒160-0004 東京都新宿区四谷4-20 四谷ひろば内

tel:03-5367-9601

fax:03-5367-9602

<http://www.goodtoy.org/ttm>

◆ 木育情報のポータルサイト：木育ラボ

もっと知りたい！木育のこと ウッドスタートのこと
木育の行動プランの一つである「ウッドスタート」をはじめ、様々な団体が展開している木育の取り組みを紹介し、全国各地に発信していくためのサイトが「木育ラボ」です。このサイトを中心に、全国で木育を推進している組織・団体を結びつけ、より強固な木育ネットワークの構築を目指して活用を進めていきます。

<https://www.mokuikulabo.com/>

木育ラボ

検索



MOKUIKU
summit 2021



第8回 木育サミット

林野庁補助事業 実施報告書

2021年2月・毎週土曜日13:00～ オンライン開催

T 東京おもちゃ美術館

🏠 芸術と遊び創造協会

主催：認定NPO法人芸術と遊び創造協会／東京おもちゃ美術館 後援：一般財団法人 地域活性化センター・公益財団法人 森林文化協会・日本木材青壮年団体連合会・一般社団法人 全国木材組合連合会・東京原木協同組合・東京木材問屋協同組合・東京木場製材協同組合・東京木材市場株式会社・国際木文化学会・日本木文化学会

◆ 木育サミット 配信スケジュール

日程	時間	企画
2021年 2月1日～ 2月28日	期間中、 いつでも視聴可能	◆ 本郷 浩二 (林野庁長官) × 多田 千尋 (東京おもちゃ美術館 館長) 特別対談 「木育のこれからとウッド・チェンジ！」 ◆ 椎川 忍 (一般財団法人 地域活性化センター 理事長) スペシャルメッセージ
2月6日 (土)	13:00～14:30	企画① くらしに根づく"当たり前"の木育
2月13日 (土)	13:00～15:00	企画② 持続可能な社会にむけて、次世代をはぐくむ ～木育×SDGs推進における各地域の実践～
2月20日 (土)	13:00～14:30	企画③ 子どもを中心に木育を考える ～コミュニティにおける木育の役割～
2月27日 (土)	13:00～15:00	企画④ デザイン視点で考える木育普及の可能性
	15:30～16:30	企画⑤ 「儲かる」木育 ～「花巻おもちゃ美術館」の挑戦～

◆ 後援

一般財団法人 地域活性化センター	東京原木協同組合	国際木文化学会
公益財団法人 森林文化協会	東京木材問屋協同組合	日本木文化学会
日本木材青壮年団体連合会	東京木場製材協同組合	
一般社団法人 全国木材組合連合会	東京木材市場株式会社	

◆ 木育推進委員会 (敬称略・五十音順)

青木 亮輔	株式会社 東京チェンソーズ	田口 浩継	熊本大学大学院
青野 裕介	株式会社 Tree to Green	多田 啓	日本木材青壮年団体連合会 / 株式会社アサモク
一條 達雄	一條ランバー株式会社	長谷川 泰治	株式会社 長谷萬
大谷 忠	東京学芸大学大学院	松崎 美穂子	NPO法人 子育て支援ネットワークとくしま
小友 康広	株式会社 小友木材店	水谷 伸吉	一般社団法人 more trees
小島 勇	株式会社 イトーキ	山下 晃功	島根大学

◆ ウェルカムメッセージ

主催の特定非営利活動法人芸術と遊び創造協会 理事長 多田千尋より、初のオンラインによる木育サミットへの参加を呼び掛けるため、ウェルカムメッセージを配信した。
◆ 配信期間：2021年1月13日～2月28日
◆ 配信方法：ホームページおよびフェイスブックでの配信



◆ スペシャルメッセージ

主催者と木育推進において連携協定を結んでいる一般財団法人 地域活性化センター 理事長 椎川 忍氏によるスペシャルメッセージを配信し、木育サミットへ参加することの意義を伝えていただいた。
◆ 配信期間：2021年2月1日～2月28日
◆ 配信方法：参加申込者への限定配信



◆ 本郷 浩二 (林野庁長官) × 多田 千尋 (東京おもちゃ美術館館長) 特別対談

「木育」のこれからと、ウッド・チェンジ！

語り：本郷 浩二 (林野庁長官)

少年時代と原体験 石川県金沢市で生まれ育ち、浅野川と卯辰山が子ども時代の遊び場だった。金沢はヒバ(アテ)という木でつくられた町で、その香りが大好きであった。大学で林学を志し、社会のお役に立ちたいという思いから、公務員を目指した。

林業の現場での経験 最初に赴任した鱒ヶ沢赤石川流域には白山山地があり、林業的に手つかずの山がたくさん残っていた。大学で勉強したことは現場での体験にサジェスションは与えてくれたが、ソリューションは自分で考え見つけ出すことが必要だと感じた。皆が喜び、納得する解決策を見出すことが大事である。

林業のソリューション 山村地域にお金を回せるようになってきたことで疲弊した林業地域の解決策になるのではないかと感じる。しかし、それとは別に、大きくなった木をどう使うかという問題がある。供給過剰による価格の下落、新たな需要創出が課題となる。そこで「森林の総合利用」によって山村経済を維持していく、という考え方がある。今後は木材を生産しない森林の使い方、山を別の形でつかうビジネスを目指せないか。いずれにしてもお客さんは都市の住民である。山村と都市のつながりをどう作っていくかが課題である。

森林環境税と理念 放置されている山の問題の解決策としての森林環境税(譲与税)だが、都市にも人口に応じてお金が入る。このお金を山村に還流させる仕組みを作ることがこれからの課題である。山村経済の出口は都市にしかない。都市住民には自分の消費が山村に還り、消費者も生産者も幸せになる、という考えに至ってほしい。

政策としての木育 木育は政策的には消費者教育だと思っている。木育で育った子供たちが木の生産者を思い、生活に木を取り入れる消費者になれば、政策としての木育を進めて良かったと言える。

企業への期待 オフィスの木質化によって健康面への効果や、業績にも良い影響があるというようなエビデンスが出てくることに期待している。

ウッド・チェンジ ～新しい木の文化への転換～ 日本は木の文化と言われているが、明治維新、関東大震災、第二次世界大戦で木の文化をやめてしまった。コンクリートや鉄で作り変えられた街を、新しい形でもう一度木の文化に戻りたい。

木育サミット参加者の皆様へメッセージ 木育に携わる方、受ける方が、木を育てる人、ものづくりをしている人の幸せにまで思いを馳せられる木育になってほしい。山村・都市・人々を健康に幸せにつなげてくれる運動を作ってくれたら嬉しい。



[1] 企画の趣旨

本分科会では暮らしの中でもっとも身近な「食」を通じて、消費者や生活者に木や森について、考え、木育が身近にあることに気づく機会とすることを目的としている。木を活用した製品や住宅などの作り手側とユーザー側の両面から食×木育を通したこだわりある暮らしについて考えていく。



[2] 各報告概要

事例紹介① 「食を取り巻く木のモノづくり」 株式会社オークヴィレッジ 取締役 佐々木 一弘氏

1974年創業の株式会社オークヴィレッジは飛騨高山で創業以来、持続可能な循環型社会を目指し「木」という再生可能資源によるモノづくりを続けている。塗り直しができるエコロジカルな塗装として創業時からこだわって使っている「漆」を消費者に体験してもらうため、お椀と漆塗り直しサービスをセットにした商品も販売している。塗り直すほどに美しさの増す漆器は愛着がわき、日常の中に木を取り入れることにつながるのではないかという思いで、商品開発を行った。また、お椀に使う広葉樹は山に生えているため農薬も使っておらず、誰が伐って加工したのかトレーサビリティがわかる。口に触れる繊細なモノであるからこそ、食だけではなく食器にもこだわりがあってもいいのではないだろうか。

事例紹介② 「食空間を通して学ぶ木育」 株式会社長谷川萬治商店 代表取締役副社長 長谷川 泰治氏

長谷川グループは、木材の加工から販売、建築まで手掛けており、木育に関しても「MOKULABO」という木育推進プロジェクトを立ち上げ、積極的に取り組んでいる。木育を推進していくため多様な連携を行っており、ウッドスタート宣言によりつながった上野村とは、上野村の施設に木の遊具設置や、上野村の木材で製品開発などを行っている。また、同社が運営する飲食店「手打ちそばと酒菜深川萬寿庵」は内装についてデザイナー会社とともに木質化を進めたところ、お客様が3割増となり、売り上げが向上した。これからの環境に配慮していく社会では、あらゆる面で木のある生活が求められており、多様な連携をすることで、木による課題解決などを進めることが重要である。

事例紹介③ 「木炭で美味しく楽しく、そしてツナガル(食育・火育・木育)」 有限会社谷地林業 代表取締役 谷地 譲氏

大正5年、谷地林業は岩手県久慈市にて木炭の製造販売からスタートし、森林のトータル管理(植林・育林・伐採)を手掛けるとともに、建設事業と幅広く事業を展開している。これからの新しい生活様式の中で食に対する需要は高まってきており、その中で木炭を使うキャンプやバーベキューなどで家族や大切な人との団らんの機会を作ることが、木育だけではなく食育や生活の中での火の扱い方を学ぶ火育にもつながっている。また、木炭を使い、木を植えていくことが「森林づくり」につながる。森林の循環を促すことで、持続可能な木の利用にもつなげていく必要がある。

[3] 討論のまとめ

分科会1の「くらしに根づく"当たり前"の木育」では、大きく3つのキーワードでまとめられる。1つ目は「環境」である。お椀や家具の塗装の塗り直し、木炭を使いそれが木の循環につながっていることなど、「繰り返す」という点において、SDGsの達成など持続可能な社会の実現に木材が貢献できるのではないかということであった。2つ目は「質」である。食材は口に入るものだから口に入る道具の質にもこだわることや空間に木を使うことでくらしの質を高めることにもつながる。3つ目は「トレーサビリティ」である。暮らしの中の道具として、木だからこそどこで育て誰が加工した道具なのかがわかることは、食と同じように重要視される必要があるとのことであった。

記録：阿多 千尋(地域活性化センター・鹿児島県錦江町より派遣)



青野 裕介 株式会社Tree to Green/大学卒業後、都市銀行・外資コンサルティング会社を経て2013年に(株)Tree to Greenを設立。木育を事業理念に掲げ、国産材の需要開拓と木材産業の活性化、木育体験の普及に積極的に取り組む。2015年より木育推進委員会委員を務める。



長谷川 泰治 株式会社長谷川萬治商店 代表取締役副社長/学生時代にAIを学びソニー株式会社に入社。国内外の工場にセル生産方式の導入を推進する生産革新に従事。2009年に同社に入社。流通、加工、建築施工まで一貫体制でサービスを提供できる強みと、生産革新と木育を基盤とした経営により新しい時代の木材業の構築を目指す。同時期にウッドスタート宣言をした群馬県上野村と協賛し木育の推進や木製品の販売を行っている。



佐々木 一弘 オークヴィレッジ株式会社 取締役 商品開発部長 兼 新規事業開発担当/プロダクトデザイナー。大学卒業後、木工修行を経て1996年オークヴィレッジ入社。以来一貫して造り手の立場からデザインに携わる。reddot design award(独)、iF design award(独)、グッドデザイン賞など受賞多数。近年は自治体等と協働し、その地域の森林資源を活用するモノづくりを核にした地域活性化プロジェクトを多数手掛けている。



谷地 譲 有限会社谷地林業 役職は木炭大王(代表取締役)。岩手県久慈市の山奥にて木炭の製造販売からスタートし、森林のトータル管理(植林・育林・伐採)を手掛けるとともに、建設事業と幅広く事業を展開。近年は木質バイオマス利用を地域にて活用すべく森林とエネルギーの持続的関係の接点役として令和元年東北エネルギー大賞を受賞。身近にあるモノの新たな価値を創造し提供することを趣味に仕事を楽しんでいる。

[1] 企画の趣旨

本企画では、林業・木材業界・教育等各セクターでの全国各地の木育実践事例をもとにSDGs推進に向けたビジョンを話し合い、次世代にどんな森林環境を残していくのか、ともに考えるきっかけとしたい。



[2] 各報告概要

(1) 日本木材青壮年団体連合会 代行副会長 松原 輝和

日本木青連では、全国児童生徒木工工作コンクールをはじめ、「環境憲章」策定と木育活動の明記等、木育推進に長く取り組んできた。全国各地での木育活動としては、大分県日田市の「木レンジャー」、石川県の「里山ウッディー君」、大阪府での「山の出前一頂」(森林環境譲与税を活用した体験イベント)等を実施。令和元年度にはSDGs委員会を設置、組織としてのSDGs推進に向け、木材の新たな活用方法を提案し、木材利用の普及拡大を目指した「木材活用コンクール」は今年で24回開催、またここよりも先駆けて、木材の炭素貯蔵機能に価値を見出した「木づかいCO2固定量認証制度」の創設等の施策を展開している。今後は業界内外とのパートナーシップを強化しSDGs推進へのさらなる貢献を目指している。

(2) 株式会社東京チェーンソーズ 代表取締役 青木 亮輔

当社は東京都檜原村を拠点とする林業会社。いわゆる「丸太林業」のできることに限界を感じ、木の素材を活かす事業やおもちゃの制作・販売等、森の恵みと都市をつなぐ4事業を展開している。地域の経済循環を生む林業を目指して、「①木材の高付加価値化、②未利用材の活用」に取り組み、村全体での取り組みを目指して「檜原トイブレッジ構想(=檜原村を日本一有名な木のおもちゃの村に!)」として策定、村役場へ提案し具体的に動き始めた。例えば、地域内での異業種連携組織の立ち上げ、ひと手間かけつつ素材を活かした「木のおもちゃ」の企画開発等を進めており、その流れが檜原森のおもちゃ美術館の設立へつながり、新たな人の流れが期待されている。木育をきっかけにした「丸太林業から小さくて強い高収益型林業への転換」は、持続可能な森林資源を育むことにつながっている。

(3) 熊本大学大学院教育学部研究科 教授 田口 浩継

本学では、学生が木を素材としたものづくり活動を提供しているほか、木育を理解し推進する仲間を増やすための講座を全国で開講、11年間で延べ2,822人の修了者を輩出してきた。教育のあり方が知識偏重型から知識活用型へ移行し、21世紀型能力として「思考力」が重視される中で、木育やSDGsの理解は他の能力の育成につながる教育の手段となる。そして、物事を分類して捉える論理的思考とお互いのつながりを見るシステム思考を身につけて様々な見方で考えることが、SDGsの理解につながる。適度な森林伐採は樹木の二酸化炭素の吸収を促し、木材を使った住宅や木製品は街中に「第2の森林」を生み出し、自然豊かな田園や里山の風景は人の手が入ることで維持できる。自然と上手に関わることで自然を守る「SATOYAMAイニシアチブ」はSDGsとの関わりが深い考え方であり、この考え方を子どもたちや教員を志す学生に伝えている。

(4) 株式会社ローカルファースト研究所 代表取締役 関 幸子

日本では、地方創生とSDGsを一体的に取り組む「地方創生SDGsの実現」が政策の大きな柱となっており、取り組みの加速化・可視化・普及啓発に向けSDGs未来都市が選定され、SDGsの「気づき・認知」が進められているところである。例えば、SDGs未来都市に選定された岡山県西粟倉村での森林信託事業は、金融機関を巻き込んだ「食える林業」を目指す取り組みであり、「経済・社会・環境」の3側面の好循環をいかに作り出すかがSDGsの重要な視点であることを示す好事例だ。今後、SDGsを認知から実装へ進めていくために2点提言したい。第一に、一次から四次といった縦割りの産業の捉え方ではなく、社会課題解決を念頭に、横断的に、官民連携、先回りした新たな産業の捉え方への転換が必要であること。第二に、「魚を与えず、竿を与えよ」、対処療法ではなく根本的な解決策を考え実行すること。真の木育推進のためには林業を産業として成り立たせることがSDGsの本質である。

[3] ディスカッションのまとめ

木育の最終目的の一つに「生き方や価値観を問い直す」ことがあり、コロナ禍の今だからこそ、森林環境や木育の価値を実感している人も多いのではないだろうか。SDGsを見据えた木育推進のためには、社会・経済との連携が不可欠であり、持続可能な林業には若い力や新しい人材、他分野との連携によるイノベーション、既成概念からの転換が求められている。

記録：丸山 大貴(地域活性化センター・長野県大町市より派遣)



青木 亮輔 株式会社東京チェーンソーズ代表取締役/檜原村木材産業協同組合理事長/東京農大卒。「小さくて強い林業」を目指し、高付加価値型林業に取り組み。内閣府規制改革推進会議農林WG委員、東京未来ビジョン懇談会メンバー。



関 幸子 株式会社ローカルファースト研究所
・三鷹市役所にて産業政策を中心に27年間の地方行政の経験を持つ。三鷹駅前図書館長(図書館司書)でビジネス支援図書館の導入、株式会社まづくり三鷹でシニアアマネジャーとして全国初のインキュベーション施設整備とその運営を行う。・2009年から株式会社ローカルファースト研究所代表取締役に就任。・2011年から東洋大学大学院経済学研究科客員教授。・2017年から経済産業省産業構造審議会地域経済産業分科会委員。・2018年から内閣府自治体SDGs推進評価・調査検討会委員。・地域産業政策、地域の資源を使って産業を創出する専門家



田口 浩継 熊本大学大学院教育学部研究科・教授/博士(公共政策学)。幼児から高齢者を対象に全国各地で年間1万人に木育の出前授業・講座、講演会やものづくり活動の場を提供。木育推進員養成講座の講師も務め、11年間に2285名の木育の指導者を養成。



松原 輝和 日本木材青壮年団体連合会 令和2年度 代行副会長/松原産業株式会社 常務取締役営業本部長。前職で都内IT企業にてシステム開発に関わる。2006年より北海道各地に約4300Haの所有林を有する同社へ入社し、山林経営からフローリング、シナ合板製造、並びに建材販売など総合的な事業展開を行っている。日本青年会議所など多くの公職を兼務し、SDGsや地方創生、国家政策に関する事業の立ち上げや運営を経験。現在、日本木材青壮年団体の活動を通して業界内でのSDGs推進を掲げ活動している。

【1】 企画の趣旨

木育は、子どもを中心に地域、幼保育園、学校等、様々な場面を繋ぐものとして、日常のいたるところに存在している。これまでの木育活動では、木の家に「暮らす」ことや、木のおもちゃで「遊ぶ」こと等、我々の日々の暮らしの中にある樹木の存在を介して木育を考察し、「木の良さ」「木育の可能性」等を共有してきた。しかし、「なぜ、木育なのか」「木育と地域をどのようにつなぐか」という点について言語化しにくい、という課題があった。2月20日開催の木育サミット「子どもを中心に木育を考える～コミュニティにおける木育の役割～」は、このような課題認識のもと、木育の定義にも立ち返りながら、木育の実践者、参加者とともに、「地域、多世代と木育をつなぐための鍵」を考察し、サミットが参加者の「子どもを中心とした多世代に広がる木育」を進めるきっかけとなるよう、議論が進められた。

【2】 議論

本サミットでは議論のコーディネーターに株式会社一條ランバー代表・一條達雄氏を、パネリストとしてNPO法人子育て支援ネットワークとくしま理事長・松崎美穂子氏、岐阜県美濃保育園園長・雲山晃成氏、株式会社東京森と市庭・営業部長・菅原和利氏を迎えた。松崎氏が代表を務めるNPO法人子育て支援ネットワークとくしまは、商店街の空き店舗を活動拠点に木育活動を推進している。木育の意義を「子育て支援を最終目的ではなく、環境保全、森、山につなげる」と感じた松崎氏は、活動を通じて出会う親子や地域の人と触れ合う中で、木育の魅力を多世代に伝えることや地域につなげるためには何が鍵になるのかと疑問を持つようになったという。この疑問に対して、雲山氏が園長を務める美濃保育園では、園児による木工を通じた木育を行っている。制作するものは、園での生活に必要なもので、「自分でつくり、メンテナンスする」ことが特徴である。身の回りの生活に必要なものを木工で制作することで、木の「多様性」を感じることができるといふ。この木工では、たとえ3歳児であっても、大人用の工具を用いる。この点に、多世代に木育を繋げるきっかけがある。保護者の中には、木工作業の経験が乏しく、木工自体に億劫になる方もいるようだが、「子どもの方がもっと大変」といふと、作業に親と子、祖父母と孫とのコミュニケーションが自然に生まれる。このような家族との共同作業によって多世代に木育が伝播するきっかけが生じている。

菅原氏が営業部長を務める株式会社東京・森と市庭は、多摩産材の原木の調達、製材加工、施工制作や市民向けの林業体験、企業研修の受け入れも行っている。菅原氏が重視しているのは、「製品を介して、どのようにあそびを展開できそうか」という点。木の端材を用いたものづくりワークショップや商店街での丸太切り体験等のように、木育をエンタメ化することで、参加者に「楽しみ」を共有させながら木の魅力を体感させている。木育の教育面だけでなく、エンターテイメント要素に着目し、ファンを獲得することが、多様な世代・地域への木育推進のポイントになるようだ。

雲山氏が園長を務める美濃保育園では、園児による木工を通じた木育を行っている。制作するものは、園での生活に必要なもので、「自分でつくり、メンテナンスする」ことが特徴である。身の回りの生活に必要なものを木工で制作することで、木の「多様性」を感じることができるといふ。この木工では、たとえ3歳児であっても、大人用の工具を用いる。この点に、多世代に木育を繋げるきっかけがある。保護者の中には、木工作業の経験が乏しく、木工自体に億劫になる方もいるようだが、「子どもの方がもっと大変」といふと、作業に親と子、祖父母と孫とのコミュニケーションが自然に生まれる。このような家族との共同作業によって多世代に木育が伝播するきっかけが生じている。

【3】 議論のまとめ

以上の議論を踏まえ、木育の意義をより多世代に伝え、地域につなげるためには、次の視点が重要であることがわかった。つまり、木育の推進の軸を「子育て支援」のみに据えるだけではなく、コミュニケーションを誘発する「体験」の機会をつくること、木育を「エンタメ化」することによってファンを作ることである。

生活の中にある樹・木の存在そのものが人間同士のつながりをつくり、そこで得られた「楽しい」という感覚が、木育の広がりをより加速させるのではないだろうか。

記録：赤松 亮（地域活性化センター・奈良県生駒市より派遣）

一條 達雄 一條ランバー株式会社・一條木株式会社 代表取締役/木材の町東京・木場で木材業一筋95年。木・森への恩返しと感謝の思いを原点に木育活動を開始。ウッドスタート宣言をきっかけに社員の赤ちゃんへ秩父材おもちゃを贈呈し、社内外へ木の良さをアピールする活動に取り組む。木製玩具の開発やイベントでのワークショップには多くの社員が関わり、子どもたちが実際に木に触れる体験を提供している。

松崎 美穂子 NPO法人 子育て支援ネットワークとくしま 理事長/商店街子育てほっとスペースすきっぷ 代表/すきっぷの森もっこ代表/とくしま子育てひろば連絡協議会 会長/とくしま子育て防災ネットワーク事務局/徳島県はぐくみ徳島実行委員/徳島県総合計画審議会委員/徳島県消費生活審議会委員/とくしまユニバーサルデザイン県民会議委員/徳島県防災会議委員/関西広域連合協議会委員/徳島市子ども子育て会議委員 他

雲山 晃成 昭和47年生まれ 愛知学院大学文学部宗教学科卒業/社会福祉法人 愛育会 理事長/美濃保育園 園長/慈雲山善徳寺住職/2010年より3年間岐阜モデル木育プログラム開発園に選ばれ、園内で木育に取り組む。以後保育の中で木工を中心とした木育を取り入れ現在に至る。同じく2010年から木育の理念を基本設計に取り込んだ子育て支援棟（どんぐりハウス）の建築に携わり2012年に完成。子どもから老人までの幅広い層に愛される支援棟になる。

菅原 和利 東京・奥多摩町から「林業のエンタメ化」を目指しています。/木育玩具メーカー（株）東京・森と市庭 営業部長/地域林業コンサル（株）トビムシ 木育コーディネーター
著書：自分の地域をつくる ワーク・ライフ・プレイ ミックス



【1】 企画の趣旨

ライフスタイルや働き方の考え方が変わる今、暮らしや働く場に木を取り入れる事例が増えている。木を素材として扱うデザイナーや、オフィスなど様々な空間の木質化に取り組む企業など、新しい木材活用事例から、今の社会において再認識される木の良さを考える。また、モノ・環境を作る人の視点から見える木の良さや各事例の課題点や工夫を共有することで、異なる分野の人同士がともに木育に取り組むためのヒントを探り、木育活動をより大きなムーブメントに発展させるきっかけを考える。

【2】 各報告概要

① 問題提起 大谷 忠 第1回木育サミットにおいて木育を国民運動にしたいと話し、毎年、各セクションで様々な活動を行ってきたものが実を結び始めた。これからは国民運動へとつないでいくための仕掛けが必要であり、そのために何ができるのかを木育サミットでは考えていきたい。これまでは、作り手の売りたいという気持ちと、受け取る側の木育で使いたいという気持ちがあり、その間にはつながりが生まれていなかったが、木育をデザイン視点で考えることで、川上と川下の気持ちをつなぐことができるのではないだろうか。

② 事例発表 小島 勇 2008年頃までは白い無機質なデザインがオフィス家具として売れていたが、ここ数年は有機的なデザインが流行している。なぜ、有機的なデザインが流行しているのか調査するため、イトーキ社内の木質化を進めるとともに、実証実験を行った。その結果、非木質化空間と木質化空間では、木質化空間の方が年間を通じて快適な湿度を保つことができ、社員の生産性の差やストレス面でも効果があると実証することができた。木が良いことは感覚的には分かっていたが、実験を行い、根拠づけができたことで、自信を持ってお客様のための商品づくりができると考えている。

③ 事例発表 遠藤 道明 照明を中心とした商品づくりの過程では、自然の営みから学んだことを活かし、夕日や焚火の色を示し、安心感を与えるオレンジ色を用いている。新潟県魚沼市の依頼で、カンナ屑を使った照明のシェードをデザインした際には、現地のNPO法人と住民の方に参加してもらい、商品づくりでの作業を通じた交流を生んでいる。そのほか、サステナブルデザインとして、間伐材を利用したスツールや、フローリングの端材を使ったシェルフなどをデザインした。商品デザインを考える際にはストーリーを大事にしており、意匠としてのデザインではなく、デザインによる問題解決を目指している。

④ 事例発表 西村 勇哉 NPO法人ミラツクでは、分野を超えたイノベーションを通じて社会進化を加速することに取り組んでいる。イノベーションを生むためには、近いけれども使われていないモノをつなぐという考えがあり、長野県塩尻市では、地域と企業が連携して、地域資源を活かしたプロジェクトを生み出している。現在は多様性の時代と言われているが、立場や考えの違う人々が一緒に目標に向かうためには相手側の論理を認識し、コミュニケーションをとる必要があり、共通言語を掲げ、抽象度を上げると、みんなが関わりやすい場ができる。

【3】 ディスカッションのまとめ

これまでの木育サミットでは、分野も視点も違う人を引き、それぞれの立場から話をしてきたが、そこには論理の違いがあった。これからは、立場や論理の違いを認識し、間をつないでいくことが大切となる。その際には、モノから伝えられるストーリーや、知らないことを知るために一緒に活動することが必要となるとともに、問題解決も含めたデザイン視点で考えることで、木育に関わる人達が、共通言語を用いて調和することにより、木育に新たな付加価値が生まれることとなる。

記録：鈴木 充（地域活性化センター・置賜広域行政事務組合（山形県）より派遣）

遠藤 道明 株式会社ディクラッセ 代表取締役社長/デザイナー/多摩美術大学プロダクトデザイン科卒業。1990年DI CLASSE商品部設立。照明メーカーとして始動。東京、New York、Paris M&O、Londonなど国内外展示会出展。木を使ったプロダクトとして、国産ヒノキと日本の特許技術を組み合わせた照明、端材を使った照明など、木の特性を生かしたくつろぎの明かりをデザイン。

水谷 伸吉 1978年東京生まれ。慶応義塾大学を卒業後、(株)クボタで環境プラント部門に従事。その後インドネシアでの植林団体に移り、熱帯雨林の再生に取り組む。2007年に坂本龍一氏の呼びかけによる森林保全団体「more trees」の立ち上げに伴い、活動に参加し事務局に就任。

大谷 忠 東京学芸大学大学院教授/富山県出身。東京農工大学大学院連合農学研究科博士課程修了、博士（農学）。博士（教育学）。第1回木育サミット（東京学芸大学にて開催）から参加し、学校での木育活動や社会における木材加工と木育との関わり等について取り組んでいる。東京都木育支援事業委員、芸術と遊び創造協会理事（木育担当）等を務める。

小島 勇 株式会社イトーキ 商品開発本部 プロダクトマネジメント部 チームリーダー/オフィス家具業界で30数年、主に木製オフィス家具の商品開発に携わってきた。最近では2010年から始めたイトーキの国産材活用ソリューション「エコニファ（Econifa）」の初めからのメンバーとして、公共施設や民間企業向けに日本全国の木を活用したオリジナルデザインの商品を開発するとともに木質空間が人に与える効果のデータ化に取り組んでいる。

西村 勇哉 NPO法人ミラツク 代表理事。1981年大阪府池田市生まれ。大阪大学大学院にて人間科学(HumanScience)の修士を取得。人材開発ベンチャー企業、公益財団法人日本生産性本部を経て、2008年より開始したダイアログBARの活動を前身に、2011年にNPO法人ミラツクを設立。セクター、職種、領域を超えたイノベーションプラットフォームの構築と、年間30社程度の大手企業の事業創出支援、研究開発プロジェクト立ち上げの支援、未来構想の設計、未来潮流の探索などに取り組む。国立研究開発法人 理化学研究所未来戦略室 イノベーションデザイナー、大阪大学社会ソリューションイニシアティブ 特任准教授

【1】 企画の趣旨

「花巻おもちゃ美術館」を事例に、地域を元気にし、かつ「儲かる」木育のあり方について議論を行った。なお、「儲かる」の意味については、2つの軸で議論を進めた。①木育って儲かるの？(報告:小友) ②花巻おもちゃ美術館の入館者に対し、何が育まれているのか。(報告:平野)



【2】 各報告概要

■小友康広 / (株)小友木材店

花巻おもちゃ美術館は、2020年7月20日、岩手県花巻市の旧マルカン百貨店2階フロアにオープンした。設立のきっかけは、2017年、別事業でマルカンビル6階に大食堂がオープンし、成功したこと。やんばる森のおもちゃ美術館(沖縄県国頭村)の事例を知り、おもちゃ美術館の成功を確信。花巻おもちゃ美術館の目的は2つ。1つ目は体験型を売りにした《新世代型木材店の実現》。そのための看板施設&ショールームの役割を持つ。2つ目は《大食堂との相乗効果》。年間30万人が来店する大食堂の「集客&ブランド力」を利用し、「館内単価&滞在時間」を上げる。双方の良循環の実現だ。運営は完全民間型で、既存事業の人員の活用、別会社への委託等により人件費を抑えている。また、館内だけで利益確保しないこともポイントで、美術館が看板施設となることで、施設施工やワークショップの依頼が増加、営業いらずの状況となっている。資金調達にはふるさと融資を活用した。館の付帯設備などに初期投資することでランニングコストを下げ、月間コスト約200万円、10年以内で回収可能な事業計画になっている。オープン後は、来館者・売上ともにコロナで予想より落ち込んだが、平均200~300万/月の売上加え、施工依頼も増えている。入職希望者も増加。美術館での体験によりオリジナル玩具の売上も増加、コラボ商品の開発も進行中だ。

< 木下氏講評 > スケールアップだけではなくスケールアウトの時代への転換が言われている。花巻おもちゃ美術館の事例は、従来できなかった人ができるようになる、主体となる人の数が増える、そういった素地ができていく点に可能性を感じられる。社会的コミュニティをつくる大元を押さえることが、社会的意義もあれば、ビジネスにもなる好事例である。

■平野裕幸 / (株)小友木材店

花巻おもちゃ美術館の特徴は次の3つである。① 食堂×おもちゃ美術館「食とあそびのコラボレーション」② 多樹種をふんだんに使用した木質空間と歴史・文化の融合 ③ 小友木材店が運営する「おもちゃ美術館」の活用方法と実践。木育とは、「1.木に触れる 2.木に学ぶ 3.木と生きる」である。次世代を担う子供たちを木の大切さを知る大人に育てていく『林業の光源氏計画』に取り組んでいる。そのために重要なのが、花巻おもちゃ美術館だ。子どもに媚びないデザイン、遊びを通じて樹種の多様性、自然と営みのつながりを伝えることができる空間になっている。高校生へのワークショップも行い、「2.木に学ぶ」を実践している。また民間ならではの取り組みとして、お客さんの要望にすぐに応えることを実践している。貸切サービスやナイトミュージアム、手作りのインフォメーションボードや壁のペンキ塗りなどである。

< 山下氏講評 > 森林や地球環境、世代間交流を学ぶフィールドとして学校教育における総合学習にもってこいだ。パイオニア的スタイルとして学校教育と社会教育の連携・融合のモデルケースを目指されてはどうか。今は大人を教育しなければいけない重要な時期でもあり、子どもを主役としながらも、その背後にいる保護者に伝えることが大事である。

【3】 ディスカッションのまとめ

経済原理をふまえながら、木を使って社会的課題と向き合って解決している事例が花巻おもちゃ美術館である。



小友 康広 1983年岩手県花巻市に創業1905年の(株)小友木材店の長男として誕生。幼少期より経営に興味を持ち、大学卒業後「木業の発展のためには今伸びている産業や企業のことを学ぶべき」と思い、東京のIT企業スターティア(株)に2005年新卒入社。担当新規事業の成長をきっかけに2009年に分社化、役員就任。2014年父親の他界をきっかけに(株)小友木材店の代表就任。スターティア(株)の提案により、2拠点居住複数社経営を開始し、現在は6社経営中。



平野 裕幸 株式会社小友木材店/岩手大学農学部卒業後、宮城県の建設会社に入社するも3年で倒産。建築士の資格を取得し、県森林組合連合会で木材コーディネーターとして、県内の製材工場の製材・加工品を県内外の設計事務所・工務店等にPR・販売を担当。2016年12月に現在の(株)小友木材店に転職。2020年には、これまでのネットワークを利用し、岩手県産材の豊富な樹種にあふれた「花巻おもちゃ美術館」建設に携わる。



山下 晃功 1945(昭和20)年10月岐阜県岐阜市生まれ。島根大学名誉教授 木材加工教育専攻。2007(平成19)年~2010(平成22)年林野庁 木育推進体制整備総合委員会座長。現在は島根大学公開講座「生涯木育(成人向け)」を主宰し、木育人材育成を実施。『木工革命 一合板・DLモジュール木工一』(海青社)など著書多数。



木下 斉 1982年東京都生まれ。高校生時代からまちづくり事業に取り組み、全国各地の地域再生会社への出資、役員を務める。早稲田大学政治経済学部政治学科卒業、一橋大学大学院商学研究科修士課程修了。09年、一般社団法人エリア・イノベーション・アライアンスを設立。著書『稼ぐまちが地方を変える』『凡人のための地域再生入門』等多数。

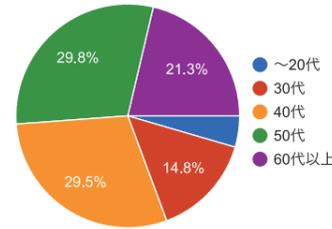


馬場 清 芸術と遊び創造協会/1963年東京都生まれ。高校、大学の教員を経て、2010年4月、認定NPO法人 芸術と遊び創造協会事務局長に就任。東京おもちゃ美術館が進めている「ウッドスタート」の取組において、全国の自治体と組んで、木育推進に取り組んでいる。

アンケート

*回答件数 553、回答率 42.0%

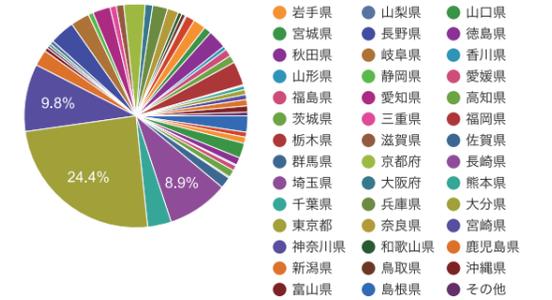
◆ 年齢



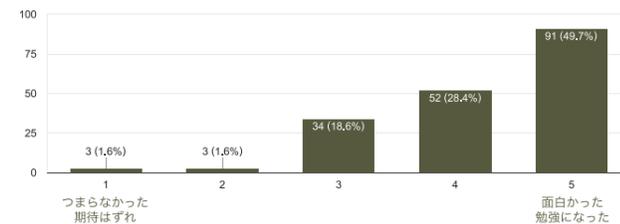
◆ ご職業



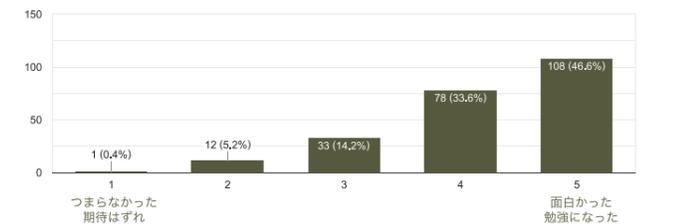
◆ お住まい



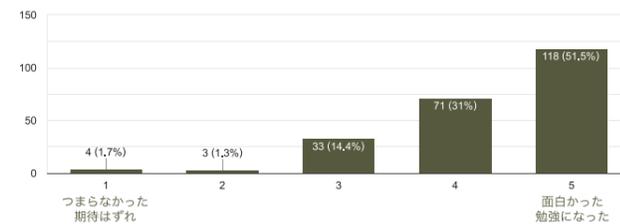
◆ 本郷浩二(林野庁長官)×多田千尋(東京おもちゃ美術館 館長) 特別対談「木育のこれからとウッド・チェンジ!」(2月1日~2月28日配信)



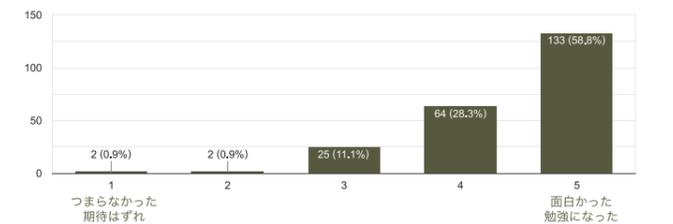
◆ 暮らしに根づく“当たり前”の木育 (2月6日実施)



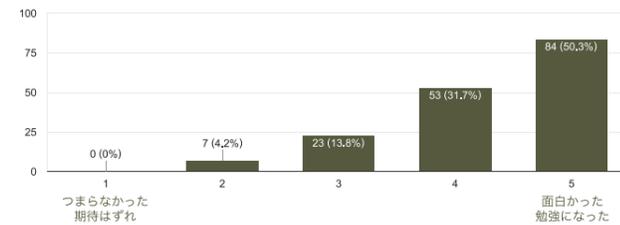
◆ 持続可能な社会に向けて、次世代を育む ~木育×SDGs推進における各地域の実践~ (2月13日実施)



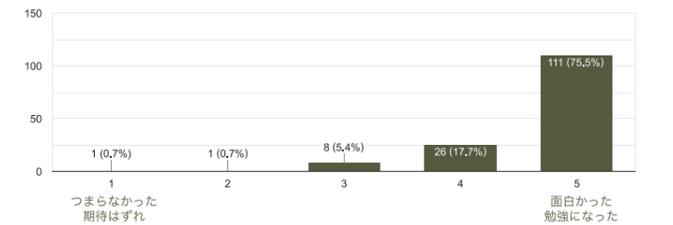
◆ 子どもを中心に木育を考える ~コミュニティにおける木育の役割~ (2月20日実施)



◆ デザイン視点で考える木育普及の可能性 (2月27日実施)



◆ 『儲かる』木育 ~「花巻おもちゃ美術館」の挑戦~ (2月27日実施)



◆ サミットに参加されていかがでしたか?

- ・改めて「日本は木の文化の国」であること、「物にはすべて理由がある」…その地域に根付いてきた伝統文化には合理性があるものなのだとことを認識しました。
- ・SDGs というキーワードで考えることで、木育や林業の枠を超えて生態系や経済・社会構造からの鳥の目の視点で考えることの重要性を実感することができました。鳥の視点で見て、虫の目で小さなことから動かしていくことを実践していこうと思います。
- ・木育は特別なことではなく、生活に根差したものでよいということをととても感じました。そして、今すぐにできることがわかり、たくさんのヒントをいただきました。
- ・環境に木を取り入れた時の心理面の効果のデータを集めていると知り、是非結果を聞いて保育環境に活かしたいと思いました。
- ・民間の強みを活かした木育の取組を聞いてとても刺激をいただきました。

❖ 木育共同宣言2021 ❖

「木とふれあい、木に学び、木でつながる」
木育活動を通して、

1. 森林と地球環境の保全につとめ、
持続可能な社会の実現を目指します
2. 素晴らしい木造伝統技術や木の文化を継承し、
これらに親しみ大切にすることを育てます
3. 我々の暮らしの中に木を取り入れ、
社会的な課題の解決を目指します
4. 豊かな森林資源の有効利用を促進し、
日本社会の活性化を目指します
5. 子どもたちの豊かな心、
感性と人間性を育む環境づくりを目指します

『木育』という言葉は、2004年に北海道で初めて提案され、2006年に閣議決定された「森林・林業基本計画」において「市民や児童の木材に対する親しみや木の文化への理解を深めるため、多様な関係者が連携・協力しながら、材料としての木材の良さやその利用の意義を学ぶ、「木育」とも言うべき木材利用に関する教育活動を促進する」と明記されました。これを受けて、林野庁では木育を推進するための委員会設置や指導者の養成を進めてきました。また全国各地のNPOや団体が木育活動を開始し、木育によって、人と森林との関わりを主体的に考えるための取り組みを実施してきました。現在、日本国内の人工林は50%以上が主伐期を迎え、森林資源の有効活用とともに、計画的な再造成をすべき時期でもあります。国産材の利用をめぐるのは、非住宅建築物への利用やエネルギー利用等、従来の利用方法以外への転換と新たな需要拡大に向けた取り組みが進んでいます。

国際社会においては、「持続可能な森林経営」(Sustainable Forest Management)から生産される木材の加工・流通・消費過程における経済的・社会的・環境的便宜をすべて包含した新たな概念『Sustainable Wood Value Chain』の構築への転換が国連食糧農業機関(FAO)によって図られるようになり、日本国内では国産材の利用割合を高め、新たな国産材需要を創出するための取り組みが重要となっています。そしてこれらの施策を実施することによって、森林資源の再造成・育成のための資金を山元へ還元し、「伐って→使って→植える」という国産材利用のサイクルを構築する必要があります。また、2015年に国連サミットで採択された『持続可能な開発目標(SDGs)』に対しては、木材利用による直接的・間接的な貢献が可能であり、政府だけでなく市民レベルでの様々な連携の構築や取り組みを進めていかなければなりません。このような持続可能な開発に基づいた経済発展と社会的課題の解決を両立していくためには、SDGsの精神にある環境、人権、平和を目指して、木とふれあい、木に学び、木でつながる木育活動を普及・推進していくことは重要な取り組みの一つになります。木育によって培われた感性や体験が、循環型社会の実現において、心の中の軸となり、すべてのいのちが尊重される社会の実現へとつながるのです。

特に2020年は、日本だけでなく世界全体が新型コロナウイルスの大きな影響を受けた年でした。このウイルスは、グローバリゼーションを背景として、気候変動や無秩序な開発による生態系の変化、そして人と野生動物の距離が変化したことで、急速に全世界に広まったと言われていています。だからこそ私たちは、もう一度自分たちの暮らしと自然との関係性について、考え直す機会にしなければなりません。すでにヨーロッパでは、コロナ禍からの復興を持続可能な社会づくりに活かす「グリーン・リカバリー(緑の回復)」や「ビルド・バック・ベター(よりよき復興)」が議論され、具体的に施策が進められています。翻って日本においては、単にコロナ以前と同じような経済復興を目指すばかりでなく、人と人のつながりの視点や人と自然とのつながりの視点から、我々の日本社会を新たに見直していくことが大切になってきました。木育の目的のひとつが、「持続可能な社会づくり」であるとするならば、コロナ後の社会のあり方を考え、人間の暮らしと自然との関係性の「もやい直し」(*)をするためにも、木育が果たす役割は、さらに高まっていくものと考えます。 ※もやい直し…元々は、船と船をつないで、バラバラにならないようにすること。転じて、水俣病の発生によって、分断された人びとや壊れてしまった自然と人間との関係を再構築するために、さまざまな立場を越えて、共通の目標に向けて、対話し、協働して取り組むことを指す。

日本国内においては、2019年度から森林環境税の譲与が開始されました。山林を多く抱える地域だけでなく、都市部においても森林整備やその促進に対して取り組んでいかなければなりません。私たち一人ひとりが、日本の森林環境に責任を持ち、暮らしと自然との関係性を意識しながら生活する、そんな時代を実現していかなければなりません。そこで、今日、私たちは、木育を中心に据え、業種・地域・年齢など様々な枠を超えたアプローチや連携を取りながら、次世代の優れた人材を育て、日本国内の森林が抱える課題解決に立ち向かい、国際社会においても責任を果たすべく、木育共同宣言をいたします。

木育共同宣言は、様々な業種・業界が木育によって繋がりが合い、木育を通じて持続可能な社会の構築に貢献しようという意志を宣言するものです。
第6回の徳島大会よりはじまり、今年度新たに493の企業・団体・個人からご賛同をいただきました。

株式会社阿波林材/株式会社ボン・アーム/徳島製材団地協同組合/株式会社Renati tura/徳島県森林組合連合会/特定非営利活動法人 徳島県森林保全文化協会/徳島市木材業協同組合/徳島県木材買方協同組合/有限会社平井製材所/東京木材問屋協同組合/一般社団法人 徳島県森林協会/徳島県中小企業団体中央会/公益社団法人 徳島森林づくり推進機構/マツシマ林工株式会社/株式会社日新 四国工場/徳田育子/森を育む紙製飲料容器普及協議会/東京木場製材共同組合/SGSジャパン株式会社/株式会社那賀ウッド/株式会社 サスティス(那賀町オフィス)/株式会社フォレストバンク/Wood Action/相生森林文化公園あいあいらんど/PHOTO浩/徳島文理小学校/岡田育大/中村守孝/東京原木協同組合/プリズム建築設計室/淡路里山を未来につなぐ会/ファイナンシャルアライアンス株式会社 大西 弘真/株式会社YMO総研/藪田ひとみ/今川木材(有)/富永ジョイナー(有)/徳島洋菓子倶楽部 イルローザ(株式会社 昌栄)/まちのちから合同会社/鈴木 智恵子/上長野ゆみ/森の研究所/小林憲司/須原仁志/NPO法人 子育て支援ネットワークとくしま/アステリア株式会社/日本アジアグループ株式会社/パルシステム生活協同組合連合会/株式会社長谷川萬治商店/かわい幼稚園/生活協同組合パルシステム神奈川ゆめコープ/渡辺トオル/ネットヨタ和歌山株式会社/株式会社 内田洋行/学校法人足立学園 認定こども園リーチェル幼稚園/学校法人久山学園 青梅幼稚園/株式会社 熊木住建/認定こども園 松崎幼稚園/学校法人 池谷学園 グリーンヒル幼稚園/株式会社山長商店/株式会社トクジム/林 真紀/株式会社 高倉木材/社会福祉法人 めぐみこども園/生活協同組合パルシステム東京 ぱる★キッズ府中/生活協同組合パルシステム東京/社会福祉法人 一穂会 ねむの木保育園/社会福祉法人愛育会美濃保育園/NPO法人アクア・チッタ/株式会社 ネオビエント/株式会社グラント・イーワズ/ひらいホールディングス株式会社/NPO法人もあな自然楽校/日清産業/有限会社小瀬木木工所/おおにし企画有限会社/株式会社東京チェーンソー/三協商事株式会社/陽地防水工業/飛騨五木株式会社/有限会社アール・エム/フルタハジメ/株式会社 Tree to Green/一條ランバー株式会社/長門おもちゃ美術館・NPO法人 人と木/織田智佳/株式会社ウエスト/庄野昌彦/徳原浩介/木のおもちゃデポー/中島清人/平林 遥/渡邊芳彦/icon木づかいクラブ/林真理子/(株)長谷萬/松本みどり/社会福祉法人ユーカー福祉会 中野みなみ保育園/東京中央木材市場株式会社/一般社団法人 more trees/丸榮木材株式会社/GROWITH株式会社/株式会社 島田小割製材所/三幸林産株式会社/庄司木材株式会社/クミノ工房/細田木材工業株式会社/ヒーローズ整体スタジオ/NPO法人 手力男(タヂカラオ)/鳴門教育大学大学院・尾崎士郎/一般財団法人 地域活性化センター/一般社団法人 移住・交流推進機構(JOIN)/HIROYUKI YAMAMOTO/kaku-kaku lab./Kono Yubi株式会社(このゆび保育)/KYOJINDO/npoさんさんご/ NPO法人いわきの森に親しむ会/NPO法人ワーカーズコープ/NPO法人わおん/NPO法人 木育フォーラム/Woodbox Tera/アクティオ株式会社 名古屋営業所/アサヒの森環境保全事務所・松岡洋一郎/あづみ野小林農園/イッポラボ合同会社/_オオイシアサミ/カジキョウコ/こどもデザイン研究所/サイトウカズコ/スズキセイラ/たかだまさき/ツルキミワ/テシマヒロミ/トウジタクト/ナカムラヨシコ/なんとときくばりプロジェクト/ネクスト デザイン 吉田道生/フジカワカズヒコ/マキノカオリ/マツバラレイコ/みなかみ町/ミヤケケイゾウ/ムラカミ セキスイ/めぐみ保育園/モモサワナオヒコ/ユミ/阿部高志/阿部萌香/安井明/安達美絵/安嶋博志/安藤倫子/安野雄一/伊藤加代子/伊藤喜久恵/伊藤純子/伊藤明香/井出歩美/井上貴仁/井上産業株式会社/磯村賢一/一般社団法人三重県森林協会/稲岡淑子/羽生拓希/鶴飼恭子/臼田陽子/永尾和彦/遠藤宗宏/遠藤祐子/遠目塚文美/

塩田正興/奥村亜希子/奥牧頼彦/奥涼介/横井進也/横尾 泉/黄義道/岡本弘子/下田かえる堂/加集安行/加藤恵美/加藤康子/加藤その子/加藤晃大/加藤由里子/加藤理香/家村祐香/我那覇美貴子/絵本ちゃん/笠原千江/株式会社 富士見グリーンガーデン/株式会社あわわ/株式会社ウベモク/株式会社こまむぐ/(株)イータス インザルーム/(株)原工務店/茅野恒秀/監物美季/関義武/関口 聡/関口信男/関本昌子/丸田香奈江/岸田毅/岩永文英/亀山武弘/亀田勇二/菊地 實/吉本卓生/橘高春生/詰坂ハルヨ/詰坂晴代/久松雅美/久保素弘/久保美保/及川幸樹/宮城 敏/宮川 敦/宮田優一/宮島瑞絵/宮本 至/橋元美穂/近藤真穂/近藤波美/金野真生/金澤貴代美/熊澤ゆかり/栗原久美子/桑村明憲/君ひとみ/原田るみこ/原田岳洋/原田知美/古性清美子/古谷美加/五十嵐淳哉/五十里伊規子/後藤友子/御田正弘/公益財団法人PHOENIX/江幡三香/高塩純一/高橋将治/高橋由美子/高桑暢浩/高山鮎美/高森保育園/高瀬宏樹/高田雅晴/高田博文/高木聡/黒肥地昂志/今枝美有紀/今成芳徳/根岸 隆/佐々木友路/佐々木絵実子/佐々木修一/佐々木和美/佐藤圭一郎/佐藤朝美/斎藤義浩/坂口朋寛/坂野恵三/三上慧/三上敬子/三宅佳奈恵/山越愛梨/山下広行/山下晃功/山下浩一郎/山口直/山口愛美/山口祐貴子/山根清美/山崎真/山田悦子/山田寿江/山田麻実/山本さなえ/山本康二郎/山本直子/山本朋美/子育て支援ステーション ニッセ/寺田愛理/篠原敏宏/柴谷みち子/若林みどり/珠の杜/酒井慶太郎/勝又麗/小鹿野町/小川晃/小暮千秋/小林陽子/松井美幸/松下哲也/松元隆廣/松田直子/上原尚美/上猶真美/城和子/常木保宏/新井恵美/森 庄/森義明/深谷孝之/神谷孝弘/水口実穂/杉山真樹/杉山有希/正阿彌崇子/清水緑香/清野和彦/西原美津江/西村良江/西脇敦史/青梅幼稚園 園長 横山牧人/石井玲子/石川哲志/石川未来子/石鍋聡/千田龍彦/川原佳子/川口正樹/浅井貴生/前田明日香/前島香保/前野 健/倉光佳奈子/早瀬 充/相馬さおり/霜出明子/村松亜希子/村上弘晃/村瀬京子/村知 綾/多胡 亮/多田 恵/太田晃/大花愛/大江裕子/大仁香織/大石知広/大谷俊行/大谷忠/大谷美恵/大嶋由紀子/大野高広/大和勲/沢あずさ/谷井雅洋/池戸通徳/池田勝秀/池田信行/中根麻由美/中山美実子/中上景一郎/中川哲太郎(個人)/中村一明/中村佳子/中村咲輝/張替謙一/長倉理恵/長谷川郁代/勅使川原智美/塚原領子/辻 利樹/坪江利香/田口眞嗣/田中のぞみ/田路寿美/渡邊 豊/渡邊妙美/渡邊杏奈/渡邊由恵/渡邊 史/渡邊雅志/登澤鈴子/土肥潤也/嶋崎まるみ/嶋田英津子/藤井佐江子/頭金多絵/内村光希/内田寿美/内田洋子/鍋田拓哉/南成年/楠 慎也/難波梨菜/日垣 瞳/日高真理/入田直子/能登山明美/馬場恭子/梅田信吾/萩原弥香/迫平隆志/埜町/反田和樹/飯村静江/樋田享子/扶蘇文重/武藤剛/福井賢治/福田貴美子/平沢一臣/平田朋子/片野絢子/北垣悠希/北橋善範/牧田かおり/堀田有恵/本永あずさ/本間定寿/本郷悠夏/本多孝法/茂木わかこ/木育おもちゃ&フリースペースTreeBranch/木育くらぶPuu/木戸南子/木山美佐枝/木村 司/木村開登/木村泰則/目時拓郎/野宮幸江/野崎一仁/野上知美/有吉緑/有限会社木村木品製作所/有村由佳/藍原理津子/里山未来舎/劉愛萍/龍見杏里/林康江/林 真紀/林 麻衣子/林 恵子/鈴木真由子/鈴木健司/鈴木康史/鈴木秀伸/和田敬子/國弘洋司/檜尾安樹絵/濱田昭文/磯村洋之/齋藤暁子/高垣明子/高久 仁/高橋真智子

(敬称略・順不同)

